

快感原則と現実原則の彼岸へ

梅内 幸信

Beyond The Principle of Pleasure And Reality

Yukinobu UMENAI

Abstract

In the 19th century man reached the realization that human unconsciousness is just a true labyrinth through research on the literature of the absurd of E. T. A. Hoffmann and F. Kafka, etc.

It is indispensable for children who try to imprint the patterns of their parents' habits into their own minds in order to cultivate the spirit of what is right and what is wrong. The patterns of habits mean the patterns of man's psychological reactions which are based on the principle of pleasure and reality (displeasure) such as S. Freud advocated.

We can find such figures, not only in the persons of Sindbad the Sailor and Sindbad the Porter in *Arabian Nights*, but also in those of Tu Tze-chun the Extravagant and Tu Tze-chun the Ascetic in Akutagawa's *Tu Tze-chun*. This binominal conflict in an individual corresponds to the specialization of the human mind. They are poles in the human mind and they compensate each other. In consideration of this relationship, we arrive at the conclusion that the principle of pleasure works as a function of motherhood with humor, the principle of reality as a function of fatherhood with irony and the transcendental ego as a function of a wise old man or great mother.

キーワード：1. 快感原則と現実原則， 2. 二重人格， 3. シンドバッド， 4. 『千一夜物語』，
5. 芥川の『杜子春』

Key Words：1. the principle of pleasure and reality, 2. the binominal conflict in an individual, 3. Sindbad,
4. *Arabian Nights*, 5. Akutagawa's *Tu Tze-chun*

第1節 快感原則と現実原則

心の仕組みが、時計や車の内部構造のように、目に見えるものであれば、人間は、もっとたやすく自分の心を操縦できるであろう。しかしながら、心の仕組みというものは、人間の目には見えない。同様に核エネルギーも、目にも見えず、匂いもしない。それにもかかわらず核エネルギーは、甚大な力を揮う。この力は、悪用されるとき、人類に想像を絶する悲劇をもたらすが、しかし他方、正しく用いられれば、人類に大きな恩恵をもたらす可能性を秘めている。人間の心的エネルギーも、核エネルギーと同様な力を持っている。産業革命時代以来、人類は自然科学の発展を信じ、科学の力によって宇宙にも飛び立つことができると考えた。H. G. ウェルズによる SF 小説の創始によって人類は、無限の宇宙に思いを馳せ、未だに解明されない宇宙を大迷宮として、また、未だに解明されない地球を小迷宮として把握した。しかし、やがて

S. フロイトの精神分析学や F. カフカの不条理文学の研究によって、人間の無意識こそが真の迷宮であるという認識に到達したのであった。しかも、この迷宮を人間は、すでに子どものときに抱え込んでいるのである。

子どもは、その成長の初期段階において、両親を初めとする周囲の人々の行動様式を「刷り込む」¹ と考えられる。この刷り込みには、子どもとしても、それなりの心的エネルギーを用いている。つまり、両親を初めとする周囲の人々の心的エネルギーに反応して、その心的化学反応の結果生じた心的産物を記憶として蓄えているのである。この記憶の膨大な蓄積が、やがてその子どもの行動様式を生み出し、人格を形成することになる。従って、子どものこのような人格形成の過程において、両親の役割が極めて重要であることは指摘するまでもないことである。ただし、ここで看過されてならないことは、この基本的行動様式が生み出されるに際して、「善悪の判断の精神」が、同時に涵養されるか否かという点である。この基本的判断が欠ければ、忍耐と勇気は育たないと思われる。悪しき心が忍耐と勇気を獲得すれば、それは、悪魔の人間の誕生を意味する。これは、恐るべき事態であるが、しかし現代にあって、虚無の蔓延とともに、ますますその由々しき状況が拡大してきていると思われてならない。

人間が、その未来に大きな希望を託すためにも、子どもに善悪の判断ができる基本的能力を身に付けさせる必要がある。その能力の涵養にとって極めて効果的な方法が、古くから伝えられている「親が子に童話（昔話）を読んで聞かせる行為」であると考えられる。灰かぶりや白雪姫のような「忍耐と勇気」² を、人生の初期において「刷り込む」ことができたとしたら、その人の人生は、必ずや豊かなものになるに違いない。

心の仕組みを決定づける大きな力が「善悪に関する判断力」であることは、極めて重要な点である。このことは、自明の事柄のように思われるが、しかし、それゆえにこそ忘れられがちになりやすい事柄でもある。人間の行動様式は、本質的に家庭内における心的エネルギーの反応形式に基づいている。それは、フロイトが考えたように、「快感」と「不快」に基づく人間の心的反応形式でもある。フロイトによれば、「不快を避け、快を得ることを目標とする」³ 人間の心的反応形式は「快感原則」と呼ばれ、逆に、「外界から課せられる諸条件との関連で快感原則の帰結を修正する」⁴ ものが「現実原則」と呼ばれている。

人間の行動様式は、車の運転、あるいはコンピュータで用いられる二進法のように、基本的にはプラスとマイナスの二者択一に基づいている。この「プラスかマイナスか」ということは、人間の心の場合、「自分にとって快いものか」、「自分にとって不快なものか」の選択になるであろう。この選択にあっては、言うまでもなく、大抵子どもは、「自分にとって快いもの」の方を選択するに違いない。この状態は、ちょうど無意識の中の「エゴ」が、なんの躊躇いもなく、快感に基づいて勝手気ままに意識の領域へと立ち昇ってくるのと似ている。しかしながら

1 エヴァンズ, R. I. 『ローレンツの思想』日高敏隆訳, 思索社, 1979年, 17-33ページ参照。ローレンツ, コンラート 『ローレンツの世界——ハイイロガンの四季』日高敏隆監修, 羽田節子訳, 日経サイエンス社, 1989年。

2 拙著『童話を読み解く』同学社, 1999年, 352-379, 392-406ページ参照。

3 シェママ, ローラン (編) 『精神分析事典』小出浩之・加藤敏・新宮一成・鈴木国文・小川豊昭 (訳者代表), 弘文堂, 1995年, 37ページ参照。

4 同書, 92-93ページ参照。

子どもは、快いからといって、いつまでも母親の庇護の下に留まっているわけにもゆかない。やはり、成長に伴って自立しなければならないし、また、やがては両親のもとを離れて巣立ち、社会の一員として生きてゆかねばならない。そのためには、「快感原則」にのみ基づいて行動することはできない。自己を限定し、自己を律して、「快感原則の帰結を修正する現実原則」に基づく行動様式をも身に付けねばならないのである。S. フロイトは、快感原則と現実原則の緊張関係について、次のように述べている。

快感原則がはばまれるまず第一の場合は、通常の場合として、われわれになじみ深いものである。われわれの知るところでは、快感原則は心的装置の一次的な働き方にふさわしいものであるが、外界の重圧のもとにおかれた有機体が自己をまもるさいには、最初から無用であり、そのうえはなほだ危険である。自我の保存本能の影響をうけて、現実原則 Realitätsprinzip がそれに交代する。現実原則は、最後まで快感を獲得する意図を放棄することはないけれども、満足を延期し、満足のさまざまな可能性を断念し、長い迂路をへて快感に達する途中の不快を一時感受することを、うながし強いるのである。快感原則は、そのときにもなお、長期にわたって、ひとしお「教育しにくい」性的衝動の働き方になっている。そして、快感原則は、これらの性的衝動によって働くにせよ、再三再四、現実原則を圧倒して有機体全体に損害をおよぼすことになるのである⁵。

この快感原則と現実原則との緊張関係において、人間の内面が2つの衝動によって揺り動かされるのは、決してファウストのみではない⁶。人間であれば誰でも、この2つの衝動によって突き動かされていると言える。この2つの衝動が激しく対立し、一方が他方を消滅させようとするとき、ジキル博士とハイド氏の悲劇が生ずる。ただし、人格の分裂、あるいは多重人格（正式には、解離性同一性障害）の問題⁷は、ある意味では、現代人であれば誰でも、多少は抱えているものである。これを「病」として把握することは、もはや賢明なことではない。むしろこれは、現代の人間が霊的に脱皮するために越えなければならない1つの障壁と見なすべきであろう。

人間の内面における2つの衝動に着目するとき、ファウストのように、1人の人間の内面における2つの衝動が、それぞれ別個の人間として描かれている文学作品が存在する。それは、『千一夜物語』における代表的な物語として有名な『船乗りシンドバッドの物語』⁸と『唐代

5 『フロイト著作集』（第6巻）、井村恒郎・小此木啓吾他訳、人文書院、1970年、152ページ。

6 ファウストは、次のように嘆く。「君は人間の衝動の片一方しか知らぬ。／もう一方の衝動は知らずにいた方がいいのだ。／己の胸には二つの衝動が棲んでいて、／互いに離ればなれになろうとしている。／その一つは、烈しい欲情で、この現世に／しっかりとしがみついているのだが、／もう一方のは、ぜがひでも塵界を離れて、／偉大な先人の在す境界へ登って行こうとしている。」（／は、改行を示す。原文のルビは省略した。ゲーテ『ファウスト』高橋義孝訳、グラフ社、1979年、70ページ参照。）

7 拙著『悪魔の霊液——文学に見られる自己の分裂と統合』同学社、1997年、199-256ページ参照。本明勝『あなたに潜む多重人格の心理』河出書房新社、1997年。『多重人格とは何か』朝日新聞社、1997年。和田秀樹『多重人格』講談社、1998年。服部雄一『多重人格者の真実』講談社、1998年。

8 シンドバッドという名は、最近では原語の発音に近い「シンドバード」という表記が多く見られるが、しかし、本論では人口に膾炙している前者の表記を用いる。

伝奇集』の中に収められている『杜子春の物語』である。次に、これら2つの物語におけるそれぞれ対になった登場人物を比較・考察することによって、快感原則と現実原則の機能を確認するとともに、超自我の新たな局面を照射してみたい。

本論の研究目的は、『船乗りシンドバッドの物語』と『杜子春の物語』における快感原則と現実原則の機能を確認することによって、この両者の機能の彼岸において図られる自己実現の具体的な構図を提示することにある。

第2節 2人のシンドバッド

『千一夜物語』に収められている数多くの物語のうち、『船乗りシンドバッドの物語』は、最も有名な物語の中の1つに数えられる。ただし、この物語に関しても、「グリム童話」と同様、原作を読んでこの物語を知っている読者の数は、そう多くはないと思われる。この物語を知っている読者の大半は、概ね幼い頃に読んだ絵本を通じて知ったものと推定される。ちなみに、幼児向けに出版された絵本⁹では、グリム童話の幼児向けに出版された絵本と同様、物語は、筋の省略や筋の変更を経た翻案によるテキストになっている。本来の物語は、7話から成り、7つの冒険が語られている¹⁰。

これら7つの冒険のうち、幼児向け絵本の中で紹介されているのは、第1話と第2話、第7話の3つのみである。とりわけ印象的な冒険は、なんとといっても第2話であろう。「怪鳥ルフ」の話は、世界的に有名な物語となっている。幼児向けの解説では全く問題にならないであろうが、「カルカッタ第2版」に基づく第7話は、「マルドリユス版」では、「翼をもった男にまわって、空中飛行をする。この男が蛇に半身呑み込まれている状態から救い出す」話になっている。また、この『船乗りシンドバッドの物語』は、「カルカッタ第2版」では「第537夜から第566夜までの」話になっているが、「マルドリユス版」では「第290夜から第315夜までの」話になっている¹¹。『千一夜物語』は、前代未聞の膨大な物語集であることに間違いはないが、しかし、その成立と決定版に関しては、専門家の間でも未だ定説は得られていないと言われる¹²。

ところで、『船乗りシンドバッドの物語』の原典があまり良く知られていないことに加えて、この物語の冒頭で、「船乗りシンドバッド」の分身とも言える「軽子シンドバッド」が登場す

9 『シンドバッドのぼうけん』、「よい子とママのアニメ絵本」所収、平田昭吾（文）、白川忠志（画）、ブティック社、2000年、参照。

10 「シンドバッドの7つの冒険」第1話 島のように大きな鯨での冒険。第2話 シンドバッドを捕えて空高く飛ぶ怪鳥ルフとの遭遇。第3話 人間をくし刺しにして、あぶって食う大男、人間を呑み込む大蛇との遭遇。第4話 生の人肉を食う食人鬼ゲールとの遭遇。とある国で馬具（鞍・鐙・轡）を作って財を成す。死んだ妻と一緒に葬られるという奇習を体験する。第5話 シンドバッドを馬のように乗り回す老人シャイクー。椰子の実を売ってお金を儲ける。第6話 岸辺に宝石や貴金属が散乱している孤島での体験。第7話 とある島で、像の墓場を発見し、そこにあった沢山の象牙でもって莫大な利益を得る。（『パートン版 千一夜物語 4』大場正史訳、河出書房新社、1967年、352-443ページ参照。）

11 『千一夜物語 4』佐藤正彰訳、筑摩書房、1988年、413-547ページ参照。

12 アーウィン、ロバート『必携 アラビアン・ナイト——物語の迷宮へ』西尾哲夫訳、平凡社、1998年、63-89ページ参照。

ることも、あまり良く知られていない。実際には、この軽子シンドバッドが、夏のある暑い日に、重い荷物を運んで、汗まみれになり、すっかりくたびれたとき、船乗りシンドバッドの快適な邸宅の前を通りかかり、そのみごとな庭園にありとあらゆる山海の珍味や酒が準備されている様子を見ると、我が身の運命と雲泥の差があることに、つい嘆息をもらすのである。この哀れな軽子シンドバッドを船乗りシンドバッドは、邸内に呼び入れて、ご馳走し、自分の冒険を聞かせ終わると、その度ごとに、金貨百枚を進呈する。この年老いて金持ちになった船乗りシンドバッドが、自分の冒険を聞いてくれる人を探していたなどとは、到底考えられない。しかも、第7話の末尾では、「こうして、ふたりはその後もずっと深い親交を結び、この世の愉悦や歓楽をつくして暮らしました」¹³ という具合に、物語が締めくくられている。

一般には、船乗りシンドバッドと軽子シンドバッドとの関係は、それほど注目されていないが、しかし、この2人の人物が、1人の人間における異なる2つの衝動に相当すると思われる。そして、この2人の人物がまた、フロイトの言う「快感原則に従って生きる人間」と「現実原則に従って生きる人間」であると考えられるのである。もっとも人間は、快感原則と現実原則のいずれかのみに従って生きるわけではない。通常、人間は、この2つの原則を適宜使い分けて生きてゆく。その二者択一を迫られる度に人間は、ある意味においては、自己分裂を体験せざるをえないのである。従って、フロイト学派に属するブルーノ・ベッテルハイムが考えるように、次のような「心の分化」は、人間にとって不可避の事態と言わねばならない。

我々は、自分の複雑な内的傾向がある程度分化していなければ、自分自身というものが混乱する原因とか、2つの相反する感情がいかにか我々の心を引き裂くかということ、それを統合する必要があること、などを理解できない¹⁴。

一般に、童話の世界は、一次的に描写される¹⁵。人間の行動にしても、その内面の現象にしても、決して立体的には描写されない。従って、心理小説のように、人間の感情や心の綾が詳細に語られることはない。『船乗りシンドバッドの物語』は、童話とはやや異なる物語であると思われるが、しかし、そのファンタジーに満ちた物語は、非現実的という点において、ある程度童話と共通性を持っていると言えるであろう。この関連において、『船乗りシンドバッドの物語』が、立体的ではなく、一次的に語られていると見なせば、1人の人間の内面における2つの衝動を、別個の2人の人物として描くという方法も、容易に理解されるであろう。ただし、7つの冒険が語られて、物語が終わる直前には、読者を再び現実の世界に引き戻すために、立体的な語り方が用いられることになる。これによって、「船乗りシンドバッド」と「軽子シンドバッド」が、本来は1人の人間の中にある2つの衝動であることが暗示されているのである。ベッテルハイムは、このことを次のように説明している。

「船乗りシンドバッドと軽子シンドバッド」の物語は、我々の精神について2つのこと

13 『バートン版 千夜一夜物語 4』、前掲書、352-443ページ参照。

14 ベッテルハイム、ブルーノ『昔話の魔力』波多野完治／乾侑美子訳、評論社、1987年、122ページ。

15 小澤俊夫（編著）『昔話入門』ぎょうせい、1998年、84-85ページ参照。

を示している。1つは、我々の精神の互いに矛盾した側面をいったんばらばらにする必要があること、もう1つは、そういう面には互いに密接なつながりがあり、最後には統合されなければならないこと、である¹⁶。

これは、解釈学で言われるところの「解釈学的循環」¹⁷にも似ている。2つの衝動が一旦解体され、解釈された後に再び元の文脈に戻されると、その2つの衝動は、以前と全く同じ意味に留まっているわけではない。やはり、その2つの衝動の関連は、弁証法的な発展を遂げていると見なされる。その関連には、新たな意味が付与されていると考えるべきである。船乗りシンドバッドと軽子シンドバッドの場合、それは、快感原則と現実原則との関連の他に、超自我の働きが加味されていると判断される。船乗りシンドバッドのファンタジーに身を任せた自由奔放な生き方は、フロイトの考え方に従えば、快感原則に基づいて無意識から立ち昇ってくる「エス」¹⁸に相当するものと解釈される。また、ファンタジーをもたず、現実世界の現実原則に拘束されている軽子シンドバッドの生き方は、「自我」に相当するものと同定される。しかしながら、船乗りシンドバッドと軽子シンドバッドが統合され、「超自我」の肯定的側面の影響を受けて生まれる「シンドバッド」は、「創造的人間」とも呼びうるものである。他でもなくこの創造的人間こそが、読書行為から生まれる読者の新たな人間像なのである。このように対照的な船乗りシンドバッドと軽子シンドバッドの特性を一覧表にまとめると、次のようになる。

2人のシンドバッドの対照表

2人のシンドバッド 数・項目	船乗りシンドバッド	軽子シンドバッド
1. 傾向	その人を、はるか彼方の冒険と空想の世界へと駆り立てる面。	ごく当たり前の現実に結び付ける面。
	空想に耽る。	現実にすがりつく。
	人生を理想へと導く。	過剰な空想を現実に引き止める。
2. 対応物	エス。	自我。
	無意識の領域。	意識の領域。
3. 生活原理	快楽原理を採る生き方。	現実原理を採る生き方。
4. 生活様式	なに1つ不足のない安楽な生活。	必要に迫られた暮らし。
5. 人生哲学	空想的な冒険の人生を送る。	現実の辛い暮らしをする。
6. 型	夜。	昼。
7. 本領発揮	夢を見ているとき。	目覚めているとき。
8. 欠点	想像力を持ち合わせていすぎる。	想像力、つまり身のまわりを直接取り巻くものの彼方を見通す能力を、ほとんど持ち合わせていない。
9. 視点	遠くにある理想を見る。	足下のみを見る。
10. 貧富	富める者。	貧しき者。

16 ベッテルハイム『昔話の魔力』、前掲書、123ページ。

17 ハイデッガー、マルティン「解釈学的循環の問題」溝口鏡一訳、『解釈学の根本問題』所収、晃洋書房、1979年、120-128ページ参照。ディルタイ、ヴィルヘルム『解釈学の成立』久野昭訳、以文社、1973年、54-55ページ参照。

18 『精神分析事典』、前掲書、28-31ページ参照。

「船乗りシンドバッド」は、快感原則に基づく「エス」を思う存分發揮して金持ちになった。しかし彼は、命を賭けた7つの冒険を通じて、様々な人生訓を学んだのである。青柳悦子の考えによれば、『千一夜物語』における男性の主人公は、概ね「知的・身体的な劣等者であるがゆえに」¹⁹ 英雄になるという。そして同氏は、「知性において傑出しているのは女性」であり、この意味において「『千夜一夜』はフェミニズムのモデル書としても機能しえる」²⁰ と主張している。それはともかく、快感原則に基づく船乗りシンドバッドは、やはり、現実原則に基づく「自我」の彼方にある「超自我」の助けがなければ、7つの冒険を乗り越えて金持ちとなることができなかつたと思われる。ここにおける超自我の助けとは、理性ないし分別による判断力と理解することができる²¹。この物語においては、「快感原則」が幸運にも、主人公に肯定的に機能したと言って差し支えないであろう。ここにおいて注目すべき点は、「快感原則」からファンタジーによる冒険、すなわち現実からの飛躍が生まれているという局面である。

シンドバッドが「知的劣等者」であることを裏づける証左として、第4の冒険で彼は、とある王国に流れ着き、その国の王が鞍や鐙・馬勒を付けない馬に乗っているのを見て、この国の職人たちに鞍と鐙・馬勒を作らせ、これらを付けた馬を王に進呈すると、大変気に入られ、大きな褒美をもらう。すると、大臣を初め、身分のある方々にも馬具の注文をもらい、これによって一財産を築く。こうして、王の寵愛を得たシンドバッドは、王の勧めで美しい妻をもらうが、その後「女房がさきに死ねば、亭主はいっしょに生埋めになり、亭主がさきに死ねば、女房も同じように生埋めになる」²² という奇妙な風習を知って愕然とする。しかし、女房よりも自分が先に死ぬだろうと考えて、自らを慰める。ところが、間もなくして自分の女房が病に伏せり、じきに死んでしまい、シンドバッドは地下の墓穴に死んだ女房もろとも生埋めになってしまう。彼は、最後に与えられたパンと水で長らえるが、「空腹の炎に胃袋がひりひりと痛み、渴きを覚えて、のどが燃えるように焼けて」(388ページ)くると、アラールの神に身を委ね、墓穴に投げ込まれた美人の女を「死骸の脚の骨を手にとって」(390ページ)、「女のそばに近づき、いきなり脳天をはっしとなぐり」(390ページ)つけて殺害し、そのパンと水を奪うのである。こうしたシンドバッドの行動を見ても、彼が分別のある人間であるとは到底考えられない。アラールないし快感原則の肯定的影響を被った幸運な乱暴者にしか見えない。

船乗りシンドバッドは、自分の冒険を語り終える度に、「自我」を代表している軽子シンドバッドに感謝して、金貨百枚を進呈している。しかし、彼の感謝は、金持ちの貧しい人々に対

19 青柳悦子「『千夜一夜』の主人公像と世界観——無能と人間肯定」、筑波大学大学院人文社会科学研究所『文藝言語研究(文藝編)』、1977年、49ページ。

20 同上論文、73ページ。

21 このように論述すれば、超自我は常に肯定的機能のみを持つと受け止められかねない。しかし、超自我も2つの側面を兼ね備えている。つまりそれは、「迫害的、加虐的な側面」をも持っている(小川捷之編『臨床心理用語辞典』至文堂、1981年、227-228ページ参照)。

22 『パートン版 千夜一夜物語 4』、前掲書、386ページ。以下、この作品からの引用は、この版に従い、本文引用末尾にページ数を付す。

23 サイード『オリエンタリズム』(上・下)、平凡社、下巻、2007年、11-63ページ参照。サイードは、「オリエンタリズムとは、オリエンが西洋より弱かったためにオリエンの上におしつけられた、本質的に政治的な教義なのであり、それはオリエンのもつ異質性をその弱さにつけこんで無視しようとするものであった。これが私の主張の要点なのである」(17ページ)と言っている。

する慈愛であるというよりは、現実原則に基づく「自我」の彼方に、北極星のように輝いている「超自我」に対する感謝であると見なさざるをえない。両者は、二項対立を成す存在ではあるが、しかし、サイードの『オリエンタリズム』²⁴に見られるように、一方が相手を偏見によって蔑視し、相手を支配しようとするような関係にはない。両者は、両極であって、互いに補足的な関係にある。とはいえ、軽子シンドバッドには、創造的自律精神が欠けていると言わざるをえない。やはり、現実の世界を豊かな未来へと導こうとする者にとって、勤勉と努力のみでは不十分である。あまりにも「現実原則」に忠実である人間には、「勇気」と「忍耐」が芽生えることは難しいのである。

船乗りシンドバッドは、快感原則に基づきながらも、幸運にも神のご加護によって7つの冒険を乗り越え、金持ちになることができた。しかしながら、快感原則に基づく行動様式は、いかなる場合にも幸せをもたらすとは限らない。むしろ、快感原則に基づく行動様式は、人間を放蕩者にする方が多いと思われる。杜子春の場合が、その典型例の1つである。

第3節 2人の杜子春

日本の読者が『杜子春』と聞くと、真っ先に芥川龍之介（1892-1927年）の『杜子春』（1920年）を思い出すであろう。しかし、この物語は、そもそも芥川が、『唐代伝奇集』における李復言の『続玄怪録』に収められている『杜子春の物語』を典拠として書き上げたものである²⁴。芥川の『杜子春』と『唐代伝奇集』における『杜子春の物語』が、内容的に同じものであれば、両者について比較・検討する必要もないであろう。しかし、この2つの物語は、似ているようで、本質的な部分でいくつかの大きな相違点を示している。それゆえ、ここでその両者の相違点を明確にした後に、この2人の主人公たちの行動様式を快感原則と現実原則と関連づけるという手続きが必要であると思われる。

『杜子春の物語』における主人公は、「周から隋へかけての人」（116ページ）で、「若いころから物にこだわらぬたちで、家業にはいっこうに精を出さない一方、性格は大まかで、酒を飲んで遊ばまわ」（116ページ）り、最終的には財産を使い果たしてしまうのである。いうまでもなく、この主人公は、放蕩者である。こうして彼は、「ぼろの着物をまとい、空腹をかかえて、長安の町を歩いていた。」（116ページ）そして、「飢えと寒さに悩む顔色をありありと浮かべながら、空を仰いで太いため息」（116ページ）をついている杜子春を哀れに思った老人が、彼に三百万の大金を与えてくれるのである。にもかかわらず、彼の遊び心がやがて頭をもたげて、再び遊興生活を始め、1、2年のうちにお金を使い果たしてしまう。すると、老人は、今度は1千万の大金を杜子春に与える。杜子春は、このお金も放蕩三昧の末に1、2年で使い果たしてしまう。杜子春は、三度目に老人に出会い、3千万の大金をもらう。さすがの放蕩者杜子春も、三度目には、恥づかしさのあまり、そのお金をそれまで世話になった人々に恩返しとして与え、老人への感謝の印として、仙人になるべく、老人のもとに出向く。

こうして、杜子春は、放蕩者から仙人へと生まれ変わるべく、老人のもとで「喜・怒・哀・

24 『唐代伝奇集』〔全2巻〕前野直彬訳、平凡社、1964年、その2、116-124ページ、李復言『続玄怪録』より『杜子春の物語』。

懼く・悪^お・欲・愛」という7つの試練を受けることとなる。老人は、杜子春に「丸薬三粒と酒を一杯」(119ページ)を渡して、これを飲ませると、「部屋の中の西側に虎の皮を一枚敷き、東向きに坐らせてから」(119ページ)、次のように杜子春に命じる。

「ものを言っではならぬぞ。悪鬼・夜叉・猛獣・地獄が現われ、さらには貴公の親族が縛り上げられて、さまざまの苦痛を受けるであろうが、すべて真実ではないのじゃ。動かず、ものを言わず、心を落ちつけて恐れずにおりさえすれば、なんの苦痛もないぞ。ただ一心にわしの申したことを守っておれよ。」(119ページ)

7つの試練のうち、杜子春は、6つまでの壮絶な試練には堪えることができる²⁵。それまで想像を絶する6つの試練に堪えてきた杜子春は、自分の息子が殺される場面に出会って、「あっ」と、声を上げてしまう。これによって、仙人となる修行は、一瞬にして水の泡となるのである。老人は、すべての試練を乗り越えることのできなかった杜子春をなじりながら、こう言う。

「貴公の心は、喜・怒・哀・懼く・悪^お・欲の六つはすべて忘れ去った。しかし忘れきれなかったのがただ一つ、『愛』じゃ。もしさきほど貴公が『あっ』と声を立てなかったら、わしの霊薬は完成して、貴公も仙界の人となったであろう。はて、仙人の才は得がたいものじゃなあ。わしの薬は煉り直すこともできるが、貴公の身はやはり俗世の厄介にならねばならぬ。元気でな。」(122ページ)

ここにおける杜子春には、試練を乗り越えることができず、仙人になれなかったことへの未練が未だ残っている。しかしながら、これと同様、試練に失敗する芥川の「杜子春」は、これとは全く対照的に、勇気と勝利の喜びに満ちている²⁶。ここで、『唐代伝奇集』における『杜子春の物語』に見られる杜子春の放蕩者の側面と修行者の側面とを一覧表にまとめてみると、次のようになる。

25 「1. 何千何万という騎馬武者たちとともに大將軍が現れ、斬りつけようとしたり、射かけたりしようと脅す。2. 猛虎・毒竜・俊猯(しゅんげい)・獅子・まむし・さそりなどが何万となく、吼えたけり、杜子春の命を奪おうとする。3. 大雨、稲妻、火の車によって杜子春の命が脅かされる。4. さきほどの將軍が再び現れ、杜子春の妻を拷問にかけ、挙げ句の果てに、杜子春の首が刎ねられる。5. 閻魔大王によって杜子春は、ありとあらゆる責苦を受ける。6. 閻魔大王によって杜子春は、宋州單父縣(山東省)の副知事、王勤の家に、女として生まれさせられる。女に生まれ変わった杜子春は、様々な病気に苦しめられ、成長して結婚し、息子が生まれるが、ものを言わない杜子春に腹を立てた夫が、2歳になった息子の頭を石にぶつけて殺してしまう。」(『唐代伝奇集』、前掲書、116-124ページ参照。)

26 芥川龍之介『杜子春』、『芥川龍之介全集』(第4巻)所収、岩波書店、1977年、150-166ページ参照。『蜘蛛の糸・杜子春』新潮社、1999年、46-67ページ参照。以下、この作品からの引用についてはこの版に従い、本文引用末尾にページ数を付す。

2人の杜子春の対照表

2人の杜子春 数・項目	放蕩杜子春	修行者杜子春
1. 性格	放蕩者，怠け者，鼻つまみ者。	恩を受けた者に恩を返す。
	空想。	幻想。
2. 本質	エス。	自我。
	無意識の支配を受ける。	意識による自己制御。
3. 生活原理	快感原理を採る生き方。	現実原理を採る生き方
4. 生活様式	放蕩生活をする。	辛い修行をする。
5. 人生哲学	刹那主義的	目的を持っている。
6. 型	夜。	昼。
7. 夢	快適な夢。	悪夢。
8. 想像力の有無	想像力をもたない。	想像力を喚起させられる。
9. 理想への態度	理想を抱いていない。	理想を求める。
10. 末路	放蕩生活によって貧乏になる。	富は求めない。

芥川の『杜子春』に登場する主人公も、『唐代伝記集』における主人公と同様に、放蕩者であると推定される。ただし、芥川の『杜子春』は、時代と場所の設定が、「唐の都洛陽の西の門の下」(50ページ)となっている。また、老人が杜子春にお金を手渡すのではなく、「今この夕日の中に立って、お前の影が地に映ったら、その頭に当る所を夜中に掘って見るが好い。きつと車に一ぱいの黄金おうごんが埋まっている筈はずだから」(50ページ)と言って、黄金が埋まっている場所を教えるだけである。芥川の「杜子春」が、『唐代伝記集』の「杜子春」と大きく異なる点は、主人公が老人のもとに出向いて、仙人の修行に励むその動機である。芥川の杜子春は、三度目に老人にこう応える。

「人間は皆薄情です。私が大金持になった時には、世辞も追従もしますが、一旦貧乏になって御覧なさい。柔しい顔さえもして見せはしません。そんなことを考えると、たといもう一度大金持になったところが、何にもならないような気がするのです。」(55ページ)

なにやらこの杜子春は、大金を手にしたことで、人間不信に陥ったかのような印象を読者に与える。杜子春は、仙人とともに竹杖に乗って、峨眉山へ向かう。彼の試練は、壮絶さには劣らないものの、『唐代伝記集』の「杜子春」とは違って、3つの試練のみである²⁷。

ここで杜子春は、「心配をおしでない。私たちはどうなっても、お前さえ仕合せになれるのなら、それより結構なことはないのだからね。大王が何と仰おっしゃっても、言いたくないことは黙おって御出おいで」(65ページ)という母親の声が聞こえたとき、「はらはらと涙を落しながら、「お母つか

27 「1. 虎と蛇に命を脅かされる。2. 神将に突き殺され、杜子春は魂となって、地獄の底へ行く。3. 閻魔大王の前で、自らもあらゆる責苦に襲われ、次いで馬になった杜子春の父母がつれてこられて、すさまじい責苦にあう。」(『芥川龍之介全集』、前掲書、150-166ページ参照。)

さん』(65ページ)と、声を出してしまうのである。声を発したことによって、杜子春は、もちろん仙人になる試練に失敗したことになるのであるが、しかしながら、この杜子春には失望や未練がましい気持ちは、全く感じられない。むしろ、平然と老人に向かって、こう言うのである。

「いくら仙人になれたところが、私はあの地獄の森羅殿の前に、鞭を受けている父母を見ては、黙っている訳には行きません。」(66ページ)

この答えを待ちかまえていたかのように、老人も、こう応える。

「もしお前が黙っていたら、おれは即座にお前の命を絶ててしまおうと思っていたのだ。」(66ページ)

この後、杜子春が口にする「何になっても、人間らしい、正直な暮らしをするつもりです」(66ページ)という決意は、ありきたりのもののように聞こえるが、しかし、3つの試練の後のこの言葉は、万鈞の重みを持っている。『唐代伝記集』の『杜子春の物語』(A)と芥川の『杜子春』(B)とでは、その結末が大いに異なっている。対照的な前者の「放蕩者杜子春」と後者の「修行者杜子春」の特性を一覧表にまとめると、次のようになる。

2人の杜子春の対照表

2人の杜子春 数・項目	放蕩者杜子春 (A)	修行者杜子春 (B)
1. 性格	放蕩者, 怠け者, 鼻つまみ者。	恩を受けた者に恩を返す。
2. 本質	エス。	自我。
3. 生活原理	快感原理を採る生き方。	現実原理を採る生き方。
4. 生活様式	放蕩生活をする。	辛い修行をする。
5. 人生哲学	刹那主義的。	目的を持っている。
6. 型	夜。	昼。
7. 夢	快適な夢。	悪夢。
8. 想い	空想。	幻想。
9. 受ける力	無意識の支配を受ける。	意識による自己制御。
10. 想像力の有無	想像力をもたない。	想像力を喚起させられる。
11. 理想への態度	理想を抱いていない。	理想を求める。
12. 末路	放蕩生活によって貧乏になる。	富は求めない。

『唐代伝記集』の『杜子春の物語』と芥川の『杜子春』における主人公の性格の対照的な相違は、中国と日本の伝統と文化の相違に根差すものであるからして、その解釈を一様に扱うことはできないであろう。とはいえ、筆者としては、吉田精一の次のような解説に賛意を表明したい。

『杜子春』は、中国の伝記『杜子春伝』を踏まえて、童話化したものである。杜子春が仙道を志して、仙室内に試験を受け、喜、怒、哀、懼、悪、欲の六情には負けなかったが、最後に「愛」の試験に落第するところまでは、原文と変わらない。それは七情のうち、「愛」の執着がもっとも強いことを語るのもであるが、師たる仙人はそのために仙薬を作り得ず、杜子春もまた仙人になりそこなって共に失意嘆息するというのが、原典の主旨である。これに対して芥川は、仙人になりたいために、父母の苦しみをだまっで見ているような人間ならば、即座に「命を絶ってしまおう」と思ったと、仙人に云わせている。仙人となって愛苦を超越するより、平凡な人間として愛情の世界に生き、のどかな生活をする方が、はるかに幸福だと、杜子春とともに作者も考えたのである。平凡な人情、通俗的な道徳を肯定しているようだが、そこに原作にはない、この作品の倫理的な美しさ（傍点は筆者）がある。(143ページ)

ただし、吉田精一の「この作品の倫理的な美しさ」は、別の観点からもう少し詳しく説明することが可能だと思われる。

第4節 快感原則と現実原則の彼岸へ

船乗りシンドバッドとは違い、杜子春は、快感原則によって完全に否定的な影響を被っている。成功して金持ちとなった前述の船乗りシンドバッドは、現実原則に基づいた生き方をしていて、軽子シンドバッドの、その彼岸に見える超自我の理想設定の機能に心から感謝している。この感謝の気持ちから船乗りシンドバッドは、軽子シンドバッドをもその理想へと近づけてやろうと努めている。これに反して杜子春は、快感原則の否定的影響を被って、放蕩者となってしまっている。この生き方を修正するのは、軽子シンドバッドの場合とは違って、むしろ現実原則に基づく仙人修行の方である。この意味において、『船乗りシンドバッドの物語』と『杜子春』とでは、指導権を握る人物が完全に反対になっている。つまり、『船乗りシンドバッドの物語』において、快感原則が肯定的に働き、『杜子春』においては否定的に働いていると言えるのである。従って、快感原則が肯定的に働く場合、快感原則に基づく人格は、現実原則に基づく人格の彼方に見える超自我の理想をめざさなければならない。反対に、快感原則が否定的に働く場合、現実原則に基づく人格は、快感原則に基づく人格を修正し、これを快感原則に基づく人格の彼方に見える超自我の理想まで導かなくてはならない。

ここで考察すべき点は、中国の『杜子春の物語』と芥川の『杜子春』に登場する老人が、試練に失敗した杜子春に対する反応の違いである。中国の老人が試練に失敗した杜子春をなじるのに反して、芥川の老人は試練に失敗した杜子春を、むしろ褒めている。中国の老人は杜子春に一切の妥協を許さないのに対し、芥川の老人は失敗した杜子春を容認するどころか、褒めている。この対照的な反応を考慮に入れると、中国の老人は飽くまでも人間を理想へと突き進ませる「冷徹な知性の働き」を暗示し、そして、芥川の老人は笑いとお寛容の精神をもって、地上へと戻ることも必要だと教える「柔和な感情の働き」を暗示していると思われる。このように考えると、中国の老人は「父性の具象化の現れ」であり、芥川の老人は「母性の具象化の現れ」

であるとも言え換えられるであろう。さらに敷衍すると、「父性」はイロニーの機能をもち、「母性」はフモールの機能を持っていると言える²⁸。しかし、このテーゼに信憑性をもたせるためには、もう少し説明を加える必要がある。

シンドバッドにせよ、杜子春にせよ、終局的には自己の理想像を発見し、その理想像の実現をめざしている。このように、一般に人間は、自己の現存在にそれぞれ自己の理想像を対置させ、この理想像を地上において実現するために、これを現実世界において演ずるという意識的遊戯を試みる。この試みは、イロニーとフモールを媒介として初めて実現可能なものとなる。

イロニー (Ironie) という語は、本来ギリシア語で、「偽装」(Verstellung)を意味していた。この語は、プラトン (Platon, B. C. 427-B. C. 347) とアリストファネス (Aristophanes, ca. B. C. 445- ca. B. C. 385) において主に、「嘲笑的偽装によって相手を笑いものにし、欺くこと」²⁹を指していた。周知のように、ソクラテス (Sokrates, B. C. 470-B. C. 399) はこのイロニーを対話における言語上の武器として用いたのである。ソクラテスが聞き手に認識させたいのはイデーの王国、すなわち真の存在に他ならない。彼は相手を智者、自分を無知なる者と仮定して、自分が意図することは反対のことを言うことによって、まず相手の立場を受け入れ、対話を重ねるにつれて相手を巧みに真の存在へと導く。聞き手の方はこの偽装に欺かれて、それと気づかぬ間に狭い自我の世界から連れ出され、それまでの自分自身を客観的に観察しうる高い存在に到達しているのである。このようなイロニーは、明らかに意識的遊戯の特徴を帯びている。ここにおいて注目すべきことは、イロニーが「偽装」という点において現実に対するアンチテーゼの機能を持っているという局面である。

イロニーが現実に対する意識的なアンチテーゼであるという点を十分考慮に入れば、I. シュトロローシュナイダー=コーアスがF. シュレーゲルのイロニー概念に関して「イロニーは意識であり、その行為は……否定、そしてその否定によって引き起こされる上昇として特徴づけられる」³⁰と言うとき、それはイロニーによる意識的遊戯の弁証法的な高まりを示唆しているものと解釈される。この遊戯は、模倣によって異質なものを自己の中に摂取しようとする人間の天性であり、「人間形成における前進するエネルギー」³¹に他ならない。ここに至って、現実世界における自己と理想世界における自己との間の遠心力と求心力の交流は、単に対立概念間の緊張に留まらず、いわば「反省」(Reflexion)と呼びうるものにまで高まっていると言える。これは、E. T. A. ホフマン (Ernst Theodor Amadeus Hoffmann, 1776-1822) の『悪魔の霊液』(Die Elixire des Teufels, 1816)³²における主人公メダルドゥスが行なう過去の再構成に相当す

28 拙論「ホフマンの『ブランピラ王女』に見られる「意識的遊戯」について——イロニーとフモール」、鹿兒島独仏文学論集『VERBA』(第11号)所収、1986年、73-87ページ参照。Vgl. Umenai, Yukinobu: Sieg des Humors – Über die funktionale Gemeinsamkeit des Humors in E. T. A. Hoffmanns Märchen „Klein Zaches“ und Sôseki Natsumes Roman „Ich der Kater“ – (Asiatische Germanistentagung in Fukuoka 1999 Dokumentation. Sanshusha. Tokyo 2000, S. 374-383. 『童話を読み解く』, 前掲書, 226-252ページ参照。

29 Knox, Norman: Die Bedeutung von Ironie : Einführung und Zusammenfassung. In: Ironie als literarisches Phänomen. Hrsg. von Hans-Egon Hass, Gustav-Adolf Mohrlüder. Kiepenheuer & Witsch. Köln 1973, S. 21.

30 Strohschneider-Kohrs, Ingrid: Die romantische Ironie in Theorie und Gestaltung. 2., durchgesehene und erweiterte Auflage. Max Niemeyer. Tübingen 1977, S. 88.

31 Behler, Ernst: Klassische Ironie, Romantische Ironie, Tragische Ironie, Zum Ursprung dieser Begriffe. WBG. Darmstadt, 1972, S. 93.

32 拙著『悪魔の霊液——文学に見られる自己の分裂と統合』同学社, 1997年, 210-222ページ参照。

る行為であると結論づけても差し支えない。

他方、フモールの機能を理解するためには、若干の予備知識が必要となる。ラテン語の humor は、本来「湿り気」を意味していた。そして古代人は、人間の精神状態は胆汁質・憂鬱質・粘液質・多血質という4つの異なる体液に依存するものと考えていたのである。中世の自然学において humores は、徐々に一般的になり、やがて「気質」を意味するものとなった³³。その後 humor は、フランスを経由して17、18世紀にイギリスに導入され、フィールディング (Henry Fielding, 1707-1754)、スターン (Laurence Sterne, 1713-1768)、スモレット (Tobias George Smollett, 1721-1771) 等の独特な文学を特徴づける要素となったのである。

ドイツにおけるフモール概念の内容は、ジャン・パウルのお陰に負うところが大きい。彼の『美学入門』によると、偉大なものも卑小なものもイデーのように無限なるものと比較すれば、無であると言われる³⁴。このような発想法を取ると、否定的なものにまで「世界存続のために是認されたもの、不可欠なもの」³⁵として存在権が与えられることになる。こうして滑稽なもの、無意味なもの、みすばらしいもの、不完全なものが、崇高なもの、重要なもの、偉大なもの、完全なものと同等の存在権を主張し始めるのである。このような思想は、単に文学においてばかりではなく、「同情と人間愛を喚起し、虐げられたものを守り、否認されたものを承認させ、あらゆる創造物を公平に評価しようとする18世紀に広く普及した博愛主義運動」³⁶とも密接に関連している。あい対立するものを調和しようとするフモールは、換言すれば「幻想と事実に基づく現実とを調停するもの」³⁷である。そして、このフモールによってしか、二元論に支配されている人間の地上的存在は救済されえないのである。日本の美学者大西克礼は、フモールの本質を次のように簡潔に要約している。

蓋し、「フモール」の目的は、「無限性」の前には全てのものが「無」^{ニヒツ}に均しくなる点に於いて、結局同様であることを明らかにするところにあるからである³⁸。

ただしこの場合、大西克礼がこの後に「経験的形相としての意味における『フモール』の本質としては、何処までも前に述べたやうな人間的自然性への『愛』がその根本的契機でなくてはならない」³⁹と条件づけていることを銘記しなければならない。

以上の考察によって、イロニーは知的なものであり、その本質は対立概念間の緊張にあることが判明する。この両者の本質的特徴を簡潔に把握してみれば、イロニーは「鋭く、冷たく、知的なもの」⁴⁰であり、これに反して、否定的なものをも是認し、対立概念を調停するフモールは「暖かく、包括的なもの」⁴¹として規定される。W. プライゼンダントは、イロニーとフ

33 Vgl. *Der große Duden in 10 Bänden*. Bd. 7. Dudenverlag. Mannheim/Wien/Zürich 1963, S. 276.

34 Paul, Jean: *Sämtliche Werke*. 5. Bd. *Vorschule der Ästhetik*. Carl Hanser. München 1973, S. 125.

35 Wiegand, Julius: *Humor*. In: *Reallexikon der deutschen Literaturgeschichte*, a. a. O., S. 727.

36 Ebenda.

37 Preisendanz, Wolfgang: *Humor als dichterische Einbildungskraft*. Fink. München 1976, S. 51.

38 大西克礼『美学』(上・下), 下巻, 弘文堂, 1960年, 92ページ。旧漢字は, 新漢字に改めた。

39 同上, 102ページ。旧漢字は, 新漢字に改めた。

40 Behler: a. a. O., S. 108.

41 Ebenda.

モールの機能を次のように把握している。

イロニーとは、苦痛を与える憧れによって駆り立てられた所与の現実の否定であり、人間の内面における原理としては散文的実証性のアンチテーゼである。しかしフモールは、真理が否定に、そして真理が実証性に仲介され、止揚されうるジンテーゼである……⁴²。

このように、イロニーとフモールの機能を考察してみると、「父性」はイロニーの機能を持ち、「母性」はフモールの機能を持っていることが判然となってくる⁴³。人間は、本質的に父性の特質を持つイロニーと母性の特質を持つフモールとの間の緊張関係において、あるときはイロニーを用いて遊戯し、またあるときはフモールを用いて遊戯し、北極星として輝く超自我を見失わずに、それらの両極間に自己の調和点を見出すとき、自己の理想像を実現できると考えられる。

結局のところ、船乗りシンドバッドは、快感原則に基づき、運良く7つの冒険を成し終えて生還し、無意識のエネルギーをほぼ使い果たしたとき、ようやく現実原則に基づく軽子シンドバッドの彼岸にある超自我の機能の意味を悟って、これに感謝するのである。同じく、快感原則に基づいて、二度に亙る放蕩生活で快感原則のエネルギーを使い果たした杜子春も、現実原則に基づくもう一人の自分の彼岸にある超自我の存在意義を認識するのである。これら快感原則に基づく人格と現実原則に基づく人格は、対立的ではあるが、しかし、同時に相補的でもある。これら2つの人格が、統合されるとき、いずれの人格が主導権を握るかは、どちらの人格に「良心」が宿っているかにかかっている。ジキル博士とハイド氏の場合、自殺の決意のできるジキル博士の方に良心が宿っていた⁴⁴。船乗りシンドバッドと軽子シンドバッドの場合、軽子シンドバッドを自邸に招き入れた船乗りシンドバッドの方に良心が宿っていると判断される。芥川の『杜子春』におい主導権を握っているのは、仙人になろうとするが、土壇場で人間的な情愛に共感を覚え、快感原則に基づく人格を部分的ながら認めようとする、現実原則に基づく杜子春の方である。

かくして、快感原則の肯定的影響を被った船乗りシンドバッドも、現実原則の否定的影響を被った杜子春も、方向性こそ完全に逆ではあるものの、最終的には快感原則と現実原則の彼岸にある超自我の存在の重要性を洞察することとなるのである。両極のいずれから歩み始めるにせよ、北極星のように絶えず同じ座標軸で輝く超自我を手掛かりとし、人格の統合を図ろうと心底決意するとき、人間は、十分な忍耐と勇気を獲得し、次のより高い次元へと突き進むことができるのである。

42 Preisendanz: a. a. O., S. 74.

43 ただし、この延長線上において、イロニーとフモールを、それぞれユングの元型理論における「老賢人」と「グレート・マザー」とに直接対応させることには、困難が伴うと思われる。というのも、「老賢人」と「グレート・マザー」は、その他の元型と同様、肯定的側面と否定的側面という両面的側面を持っているからである。しかし、イロニーが「鋭く、冷たく、知的なもの」であり、フモールが「暖かく、包括的なもの」であるという局面は、それぞれの本質的特性であることに間違いはない。

44 拙著『悪魔の霊液——文学に見られる自己の分裂と統合』、前掲書、238-253ページ参照。